

故宮川雄二郎君追悼號

『今年の夏山と宮川君』

小橋 謙二

宮川君は僕に關する限り友人と言ふより恩人、しかも命の親としての感じがある。僕が仙人尾根で遭難した時は、雨が吹きつけて居たし、山の雨には付きもの、霧が時々降りて来るし、山に於ける最も厭な天候であつた。僕の落つた音を最初に聞きつけたのが、確か宮川君だつたさうだ。落石かと思つて、後を振りかへると僕が居ない、僕を除く四人の連中は大いに驚き下を窺つて、傾斜の途中で僕のとまるを見届けて、現場まで来て呉れたのだつた。賀井と打橋は早速、池の平の小屋、宇奈月へと急を報せに奔走して呉れ、終始僕の面倒を見て呉れたのは伊藤と、そして君だつた。一晩過ぎて次の晝頃、食慾が出る程元気になつた時、カレーの粥を作つて呉れた。何しろ相當な負傷だつたので、殆んど當時の事を思ひ出すに由ないが、その時「もういゝのか」と心配げに尋ねて呉れた君の蒼白い顔と、憂はしげな眼が腦裡に強く焼き付けられてゐる。

遭難後、傷も漸くよくなり、今年初めて再び夏の山旅に新宿を發つた時も、宮川君と一緒にだつた。

パーティーは宮川、中島と僕の三人。途中相當泥んでゐた列車内で君は実によく睡つた。中島と二人で笑つた程だつた。

一日目は大沢小屋までだつたが、僕は久々の山行だし、荷も相當重かつたので崩沢出合を元気に過ぎてから急に足が両方共つり出して大いに困つた。宮川君は一番元気だつた。二日目、針の木沢の降りは水量が多くて、三人とも徒渉に相當手古づつたが、宮川君は何うしたのかまるで自信を無くして居た。僕達二人が渡つてからでも、流されそうな予感がするからとてザイルの使用を要求した時もあった。天や此やで大いに眠どつて、其の日は南沢出合を過ぎる数町の所で日没の爲、露營を余儀なくされた。厭な沢歩きの後だつた。久し振りの天幕で一同非常に愉快がつた。満天の星は吾々の前途を祝福して呉れた。翌日の御前谷出合、附近の露營は実に天国だつた。天幕は全く真白で、しかも少しの凹凸もない砂地に張つたし、薪はすぐ傍に山程あるし、天気はよし。何から何まで絶好だつた。君と中島が遙々御持参に及んだ釣の道具、釣竿は針の木沢の苦闘で、一本は駄目になつたが、後の一本と急造のどで、岩魚釣りの競争が期せずして宮川、中島両天狗の間に行はれた。中

島は小さいながら三四匹上げたが、宮川の唯一の
上げは実に尺餘の立派なものであった。矢張俺の方
が巧いんだと君は大いに自慢にした。ともあれそ
の夜の食事は実に豪華だった。

その次の日、予定は内蔵之助平まで沢を登るの
であつた。何れが内蔵之助沢かかを確認するのに相
當暇どつて愈々上りにかゝつたのが十一時頃だつ
たらうか。宮川君を先登に登つたが、前日の平の
小屋の親爺の言に余りにも忠実に左へからみ過ぎ
た為相當危険なガレトぶつかり、最後に動きが
とれなくなつて了つた。其処ではガイル無しでは
降りられなかつた。少し変な方向へ行つた為では
あつたが、実際にとつつきでの出来事ではあるし、
地図の上で見ると其以上の所が、又からもある様
に思へたし、急に心配になり出した。宮川が「此
所で断念しようぢやないかし」と言ひ出した時は、
すぐ賛成の意を表した。が中島が少し上まで偵察
して来て「大した事は無いから行かう」と主張し
た時、僕も或はと言ふ様な希望を持つ様になつた。
しかしこの時宮川君は頑強に反対した。そして「余
り無理をしては親父に済まないし」と言つた。吾々
は彼が泣いて居るのに気がついた。グモツと何物
かゞ胸をつくのを感じた。

宮川君の変後御宅にお悔みに行つた時、君の嚴
父が涙にむせびながらの御話を承つて居た時始終
この時の情景が思ひ出されて、知らず／＼胸の迫
るのを禁ずる事が出来なかつた。

其の日の夜中雷雨があり天候は急変して、翌日
から昨日の青空は見られなくなつた。昨日無理し
て内蔵之助平まで行つて居れば大いに弱つた事だ
らうと思ふ。霧の中を漸く五色小屋に着いてから
は数日間の滞在を餘儀無くされて了つた。烈しい
風雨は晝となく夜となく何時やむとも思はれずに
吹き続いた。大腐りと腐つていよ／＼今日は立山
温泉に降り様といふので、十三日まだ霧のまいて
居る五色小屋を出たのだったが、陰鬱に巻いて居
た霧は佐良峠にかゝる頃、次第に晴れ彌陀ヶ原の
上に現はれた青空は次第／＼に面積を増して原全
体の上に明るい光を授げかけた。その頃には五色
の霧も晴れて薬師が雄大な姿を見せ金アルプスが
吾々の前途を祝福するかに見えた。勿論吾々はそ
こで予定を変更して室堂行きと決めた。道はあの
佐良雄山間の石のゴロ／＼した急傾斜の上下する
厭な道だったが、過ぎ来し五色小屋から薬師、槍
針ノ木後立山まで金アルプスが姿を見せて、雄大
にして爽快な景色は如何に吾々の心を樂ませて呉

れた事か。

しかしこの頃から僕の足のマメは悪性に僕を苦しめる様になった。これ以上続ける事は却って皆に迷惑を掛けると思はれる程度にまでなった。室堂で一同晝食を了へてから藤橋で再會を約して御前の小屋に行く宮川、中島を送り出して独り滞在する事にした。雷鳥沢の雪渓を登る二人がけし粒位に見えた時急に寂しくなって大聲張り上げて叫び掛けたが、向ふにはどいかなのかけし粒は運動を続けて雪渓を登り切つて、グツシユの中に姿をかくして了つた。だが君の姿を見る最後にならうとは誰が想像したらう。

山男の君が海で死んだなんて、どうしても信ぜられないまゝ、十合君と二人で電報で聞き合せて程だった。死ぬ事其自身が餘程運が悪いに違ひないが、山男が海で死ぬなんて君も餘程運に見離されて居たに違ひない。しかしどうも残念な事をし了つた。

海で死んだとは言へ、君の靈は天使が乗って居るとしか思はれなかつたアルプス谿間のあの浮雲に乗って何時までも吾々に呼びかけて呉れる事であらう。

思 出

堀 岡 清

宮川との交友は昭和四年十二月即ち予科一年の時のスキー合宿から始まつて居るのであるが、その時は二人とも山岳部の部員でなかつたし、級も違つて居たので、お互に顔を合し話もして居たであらうが、全然記憶に残つて居ない。記録に依れば同月二十六日に大挙して野沢峠へ行つての歸りに初めの人がおくれで夜暗くなつてから歸つたとあるが、二本杉の所で前軍を切らして困つてゐたので自分の前軍を貸してやつた覚があるが、その人が宮川であつた様な気がする。

僕が山岳部に入部したのは予科二年の時の春であるがその時は既に宮川は入部して居た様である。然し新入生歓迎旅行に大菩薩に一結に行つて居るから殆んど同時に入部したのかも知れない。此の時の山行でも宮川の記憶は未だはつきりしてゐない。その年の夏山は僕が連れて行つた為めと一緒になつて居ない。十日の試験休には同勢六名で神津牧場へ行つて居るが、此の時にコリーなる名を頂戴したのであつて、此の頃より記憶がはつきりしてゐる。昭和六年は先づ三月のスキー(野

沢)で一緒になり九月には二人でハケ岳に行つてゐる。此の行は二人だけにして又水不足に苦しめられたり、赤岳で地震に遭遇したりしたので一番記憶に残つてゐるものである。十二月の野沢の合宿で再び一緒になつてゐる。昭和七年には四月に富士に行つて居るがその他に春の合宿にも冬の合宿にも一緒だったと思ふ。昭和八年には七月初めの三ツ峠若登練習、夏山で穂高縦走、上高地テント生活(宮川に燕槍穂高のリーダーをやつてもらつたのである)、十二月の五色合宿も一緒に過し今年一月北海道を十勝、無意根、ニセコ、札幌と一緒歩いたが三月の野沢合宿がその最後の顔合せとなつてしまつたのである。

最近あまり山へ行つてはゐなかつたが、同学年の中では一番行つてゐる方である。昨年の暮から一緒にスケートを買込んで、よき相手として滑つてゐたのに今後はそれも出来なくなつてしまつた。夏休中での突然の出来事なので、明日あたり学校でひよつくり會へさうな気がして仕方がない。家の入達が確は山へ行つて留守してゐる様な気がしてならぬと言はれる気持ちがよく分る。よりよき友の一人を失つた。心から冥福を祈つて止まない。

(九、三。)

思ひ出すまゝに

望月 達夫

久し振りの晴天だった。十何年振りの大暴風のあとの晴で、夏の空が目映いばかりに小舎の入口から望まれた。劔の尾根には雲一ツからまつては居ない。遠い後立山も近づく夕陽に美しい、静かな午後だった。

夕刻の近附いた小舎の中は、幾日目かの晴と云ふ事も手傳つて、一際雑踏して居た。今日あたり、Nのパーティーや、Oのパーティーが来るのではないかと、私達は話し合つて居た。私達の豫想通りこの二つのパーティーも元気でやつて来て、山での再會を心から喜んだものである。今はなきMはこの時Nと共に五色ヶ原からやつて来たのであつた。おとなしい彼は、元気で小舎に入るといきなり、だまつて私達の中の誰かの飯盒からNと共に、むしや、飯を食べてた様子に記憶する。

その翌日は私達は八峯へ、そしてMはNとSの三人で劔の頂上へ往復し、Kが室堂で待つてゐるので、M一人だけ下山する予定だった。私達は予定よりもゆつくり出陣した。だからM等のパーティーの方が先だった様におぼえてゐる。後用のライ

力を持参した彼を送り出したのは、はつきり記憶にのこつてゐるから。朝日を一つぱいに受けた雪溪の上を、黒い三人の人が進む。その時Mは光頭に住たか、どこだったか忘れて了はしたが、……。

私達が八峰に登つて居た時、正しく剣頂上に居る彼等三人が視界に入つた。がそれは、交はされるヨツホーの大きいのに比らべて、余りにも小さい人間の姿だった。

だから私の眼にのこるMは剣沢の雪を踏んで行く、三人の中のMに他ならない。それも三人の中心に居たかも知覚えてゐないMであり乍ら、そんなぼんやりした記憶が、私には具体的な、儼真的な記憶よりも、より鮮かだ。

思へば、Mと私をつなぐ最後の見える世界は剣沢だった。山岳部に入つて最も山に行かない私。それなのに、その少ない山行はMと一緒にの時が多かつた。そして、その最後に別れたのが、私の最も愛する山の一つ、剣であることは、私をしてMこそ山で死んで行かないから、山懐深くすまこまれて行つた人、と云ふ様な、一種異様な思ひさえ起さしめるのだ。

今夏の剣沢でこの元氣だったM、それが私の見た彼の最後である。

(元四、一〇、四)

海と山と

園山 徳三郎

突然の死が宮川君を奪つて行つた。それは余りにも意外なアクシデントではあつた。我々は彼の交を信じ得なかつたし又信じたくもなかつたのだけれど、事實は事實とせねばならぬ。

考へるまでもなく、彼も我々も深く山を愛し、山によつて結合せられてゐたのであつてこの点から言ふと或は故人に對する禮を失するかも知れないのだが、我々は彼が山で死んで呉れなかつた事を遺憾に思はずにはゐられない。死が人生の結末であり完成であるとするならば山を熱愛してゐた彼の死は其の所を得なかつたと言はねばならない。斯く言つたからとて勿論我々は彼を現世から去らしめたいのではない。又、勿論山に於ける事故を増さしめたいのでもない。山は我々にとって武士に於ける戦場に等しい。刀石に触れざる武士の死が其の本懐で無かつた如くに、あたは海に消えた。彼の命を恨しく思はずにゐられない。この災が避け難き運命であつたとするならばその好む処に死ななせられたかたしと悔むのが人の情ではあるまいか。恐らくは不幸な親御の思ふ此処に正るであらう。